

平城宮跡歴史公園 第一次大極殿院東楼

建築場所 奈良県奈良市佐紀町地先(平城宮跡歴史公園内)

建物概要 東楼 木造 地上2階 526m²

築地回廊 木造 平屋建 185m²

工事概要 新築工事(復原)

竣工年月 2026年3月

事業者 国土交通省近畿地方整備局

設計監理 国土交通省近畿地方整備局 京都宮繕事務所

公益財団法人文化財建造物保存技術協会

施工者 株式会社 竹中工務店 大阪本店

(木材活用)

伝統木造は仕上材、構造材の区別がない(構造材であり仕上材である部材が多い)ことが多いため、木材養生にはあらゆる手段を用いた。

樹齢250年～300年の長尺大径木材(12m)の外周柱には貫穴がなかったため、専用の建て方用治具を作成した。

(生産性向上・DX)

鴟尾・形状決定過程のデジタル化 ～パラメトリックデザイン×3D printer×AR～

<https://youtu.be/FlQQUjamMRA?si=anFyFTF0vOR4nZAe&t=10435>

(参考: https://cpcp.nich.go.jp/modules/r_exhibition/index.php?controller=dtl&id=51)

BIM/360度写真を活用した各種計画及び関係者間の合意形成

(防災・減災)

奈良時代の復原建築物を現行法規の耐震性能に適合

首里城の火災を受け防火対策を実施

(その他)

各部モックアップで試験施工を行い、伝統工法を守りながら施工後に想定される不具合対策を各種盛り込んだ。

特別史跡内であり、地表の数十センチ下には奈良時代の遺構が埋まっている。
手掘り等も用いて遺構を傷つけることなく工事を行った。

素屋根(工事用の仮設)は大極門施工時から使用しており、大極門完成後に東楼にスライド。
今回の東楼完成により大極門を超え、西楼建設予定地まで素屋根のスライドを実施。
今回は約1カ月の工事期間を要したが、軌条桁下の工夫により全体工期に影響するスライド期間を実働4日で完了。

現場見学会(「魅せる！現場」)の他、各種伝統技能の展示(古代から現代に至る代表的な瓦、奈良時代の瓦作成に使われる道具や様々な社寺の飾金具、鋳物の原型の展示。協力：山本瓦工業、大谷相模掾鋳造所)を行い、実際に展示品を手にもって、重さや手触りに触れ体験する経験を通して、見学者が復原工事について、より理解を深める機会を設けた。

伝統木造工事は、現代建築とは施工ノウハウや管理方法が異なる点が多いことから定期的に勉強会(伝統工種の専門会社に講演会)を設定して関係者間で知見を深めた。
(例：竹中大工道具館、長尺大径木材、宮大工、古代瓦、石材、鴟尾、塗装、発掘調査などの専門家を招聘し、大工道具、木材材料特性等について専門性の高い勉強会を実施)

平城宮跡歴史公園

第一次大極殿院 東楼 復原整備



平城宮跡歴史公園

第一次大極殿院 東楼 復原整備

工事名称 : 平城宮跡歴史公園
第一次大極殿院
東楼 復原整備工事

建物用途 : 復原展示物
敷地面積 : 175,444 m²
建築面積 : 624.70 m²
延床面積 : 525.71 m²

構造 : 木造(素屋根:S造)
基礎・地業 : RC造・べた基礎
階数 : 地上2階
最高高さ : 内部柱礎石上端
+16.762m (大棟天端)
基礎深さ : 基壇天端
-0.780m (底盤下端)

工期 : 2022年4月1日～
2026年3月(44.0ヵ月)





平城宮跡第一次大極殿院の復原工事を支えた職人の方々

<https://www.kkr.mlit.go.jp/build/policy/other/ninaite.html>

特別史跡であり世界遺産「古都奈良の文化財」の構成資産の一つでもある平城宮跡内の第一次大極殿院は、奈良時代前半、国家で最も重要な儀式が行われていた空間です。

「第一次大極殿院建造物復原整備計画（平成23年）」により、復原整備が進み、令和4年3月に「大極門（南門）」が完成。

令和4年度からは、「東楼」の復原整備が始まり令和7年度に完成。

東楼・西楼は第一次大極殿院の南正面にある大極門（南門）を挟んで東西対称に位置する建物です。

「東楼」は発掘調査や時代考証の結果、高さ約18.6mの木造2階建の建築物として復原。

この復原においても、伝統的な材料・工法を用いる基本方針を踏まえ、木材加工や瓦、金具、左官、塗装をはじめ古代建築の伝統技能を継承する様々な分野の多数の工匠の技・経験・知識に支えられ復原されている。

■建築概要

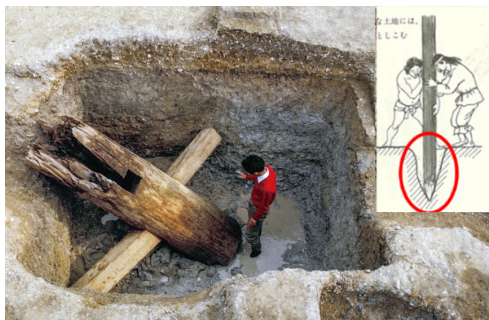
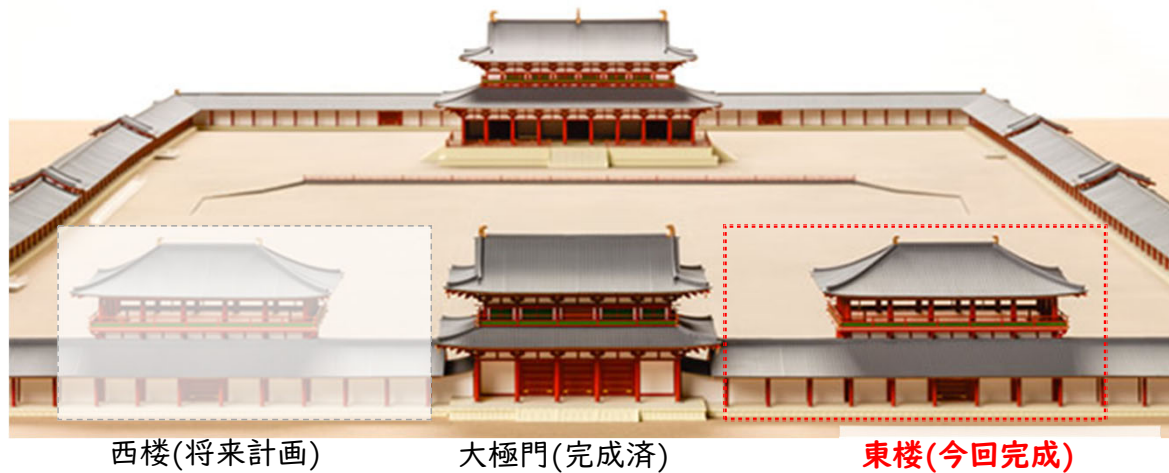
主要構造

東 楼：桁行五間 梁間三間 楼造
木造2階・寄棟造
複廊築地回廊：木造平屋建切妻造
屋 根：本瓦葺き
外 壁：土壁・木摺下地白漆喰壁
その他：木部丹土塗（床板白木）
鵠尾（青銅製鑄物）
飾金具（垂木・隅木木口）



第一次大極殿院 東楼 復原整備

大極殿(完成済)



写真：奈良文化財研究所提供

- ・昭和48年 平城宮跡内で最大の掘立柱（直径約75cm）が検出。
その他、建築史的に重要な隅蓋瓦、組物の雛形模型など、様々な発掘品が出土。
- ・第一次大極殿院の造営当初、**東楼・西楼**はなく、730年前後に築地回廊の一部を解体して増築された。
- ・**東西楼**は宴会などが催された楼閣であったと考えられている。

写真引用

<https://www.kkr.mlit.go.jp/asuka/initiatives-heijo/reconstruction.html>

■奈良に現存する同時代（AD710～794）の遺構 平城宮跡の復原では、これらの遺構を緻密に研究し、参考になっている。



正倉院正倉



唐招提寺金堂

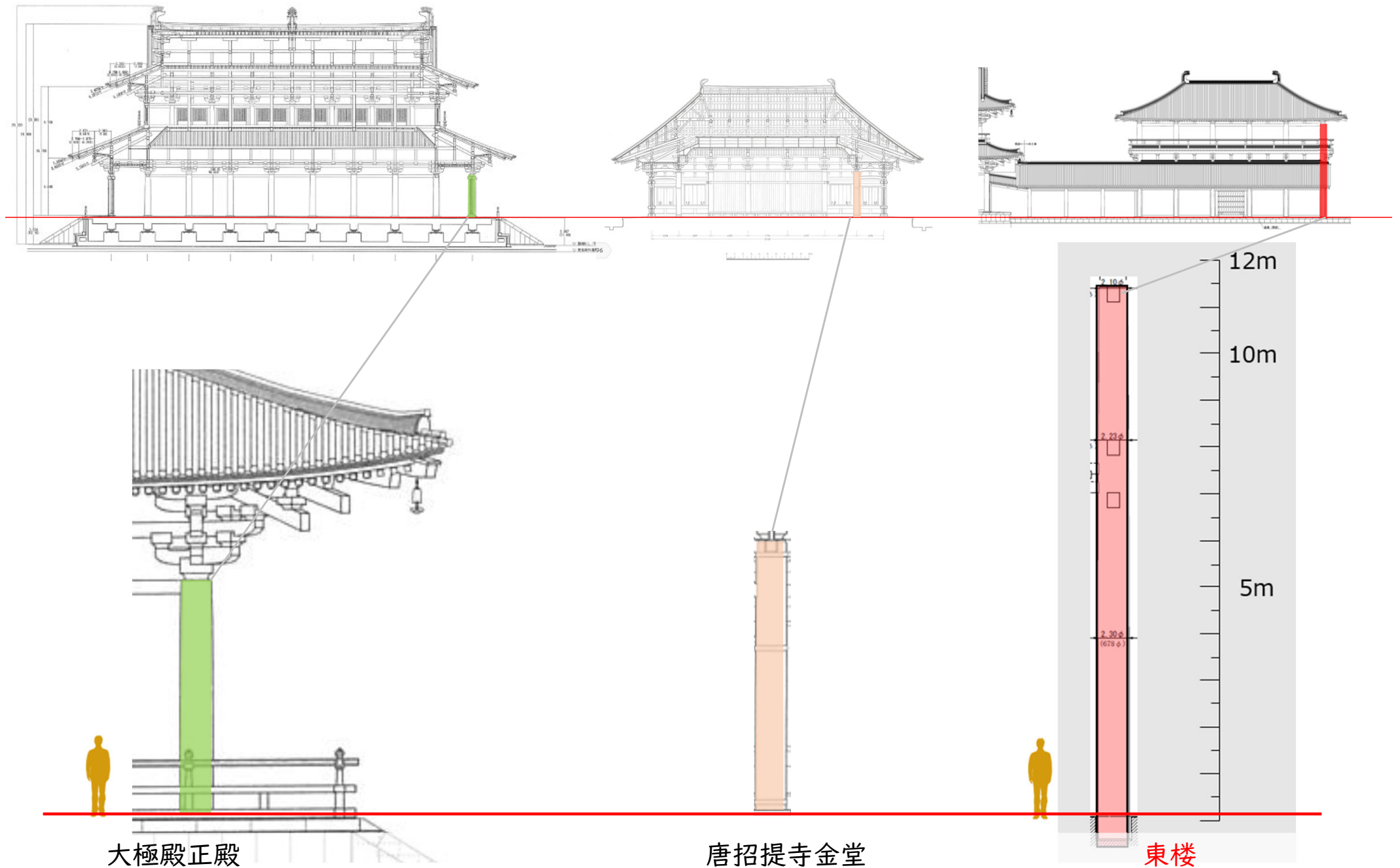


薬師寺東塔

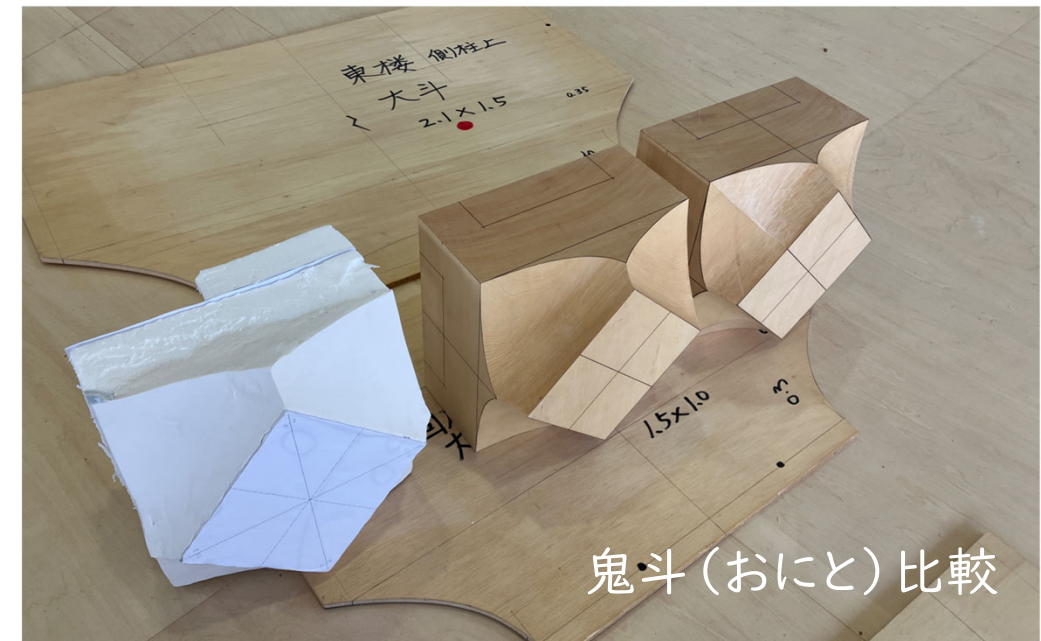
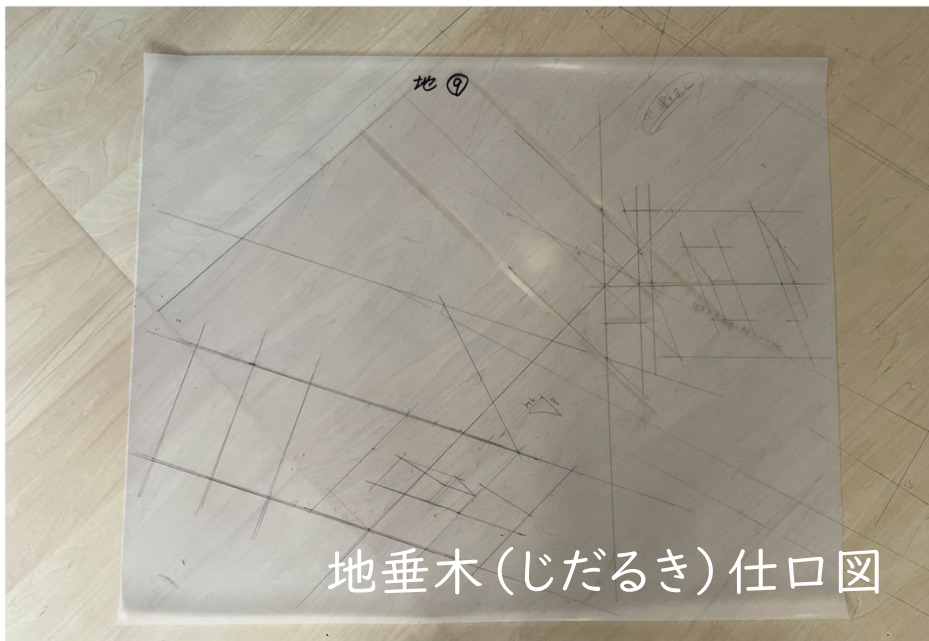


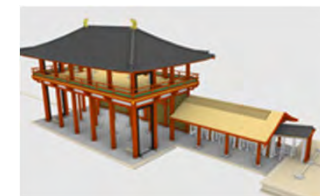
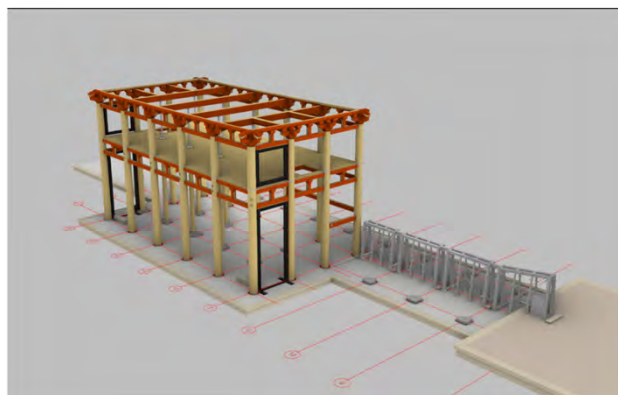
唐招提寺講堂

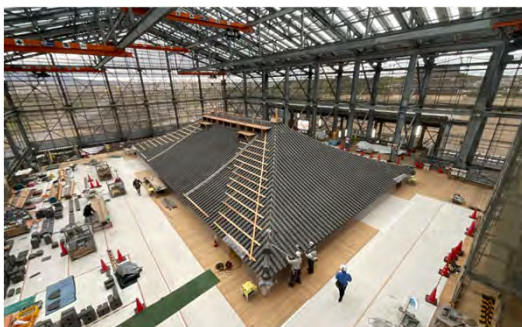
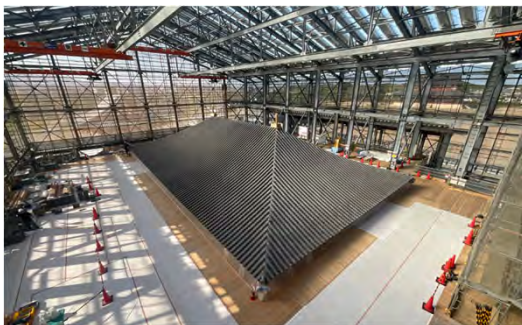
■特徴 東楼と古代の大型木造建築 柱の大きさ比べ



■原寸引付・原寸確認







平城宮跡第一次大極殿院の復原工事を支えた職人の方々

https://www.kkr.mlit.go.jp/build/policy/other/ol9a8v000001ntv6-att/ninaite_kawaraseisaku.pdf

瓦製作に携わる職人の方の紹介① 萩山本瓦工業

※この写真は2019年度取材当時のもの

岡本 宏さん

「ものを作る仕事が好き。」

京都府中、たまたま出会った素人が瓦製作だった。他の仕事と違って、ハローワークの担当者からの「瓦製作の方がやりがいがあるんじゃないか」という依頼で決断し、瓦職人の道へ進んだそう。

「過去の仕事で印象に残っているのは京都府金堂の瓦製作。」

金堂の瓦は無数の瓦で、それぞれ機械で作っていた作り方は全く違っていた。乾燥して固まった土を水に溶いて柔らかくし、細くわで割るように板の上に敷き並べ、成形した無数の瓦は形が揃わず、職人は苦労を要する。

「出来たときは嬉しかった。固まった建物はまた見に行く。」

■若い人へのメッセージ

自分が思うが、気になったならぜひ入ってみる。若い頃はすぐやり直しが出来る。入って困ったことがあれば、周りの人も同じような道を歩いているので助けてくれる。元氣いっぱいではやれば何とかなる。どんどん挑戦して自分に合うものを見つけたい。」

※無数の瓦、真土土壌を使い、作り出す。

影林 聖大さん

「伝統的な仕事面白い！」

ハローワークで見つけた素人に教えてもらった「瓦製作」という業務が目にとまった。きっかけは「面白そう」だったが、始めてみると伝統的な仕事「面白い！」と確信に変わったそう。

「完成した建物を見に行くことやってよかったと思う。」

影林さんが印象に残っている仕事は京都府金堂の瓦製作。無数の瓦は、乾燥後にねじれて変形することも多く、大変な仕事だったそう。苦労を乗り越え、完成した建物を見たときにはやってもよかったと思える気持ちになった。

「休みの日は自然に触れる。」

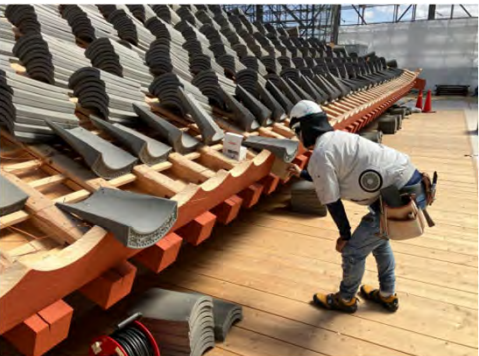
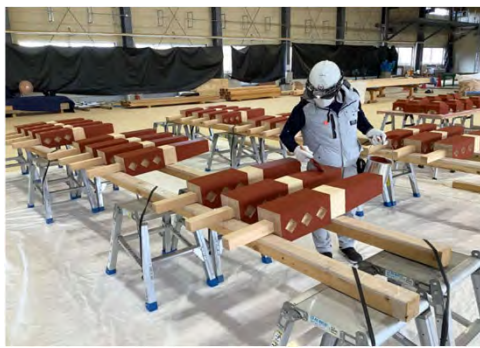
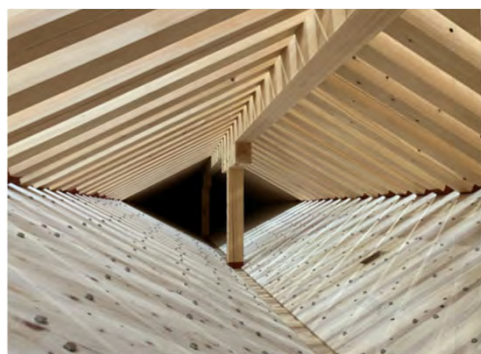
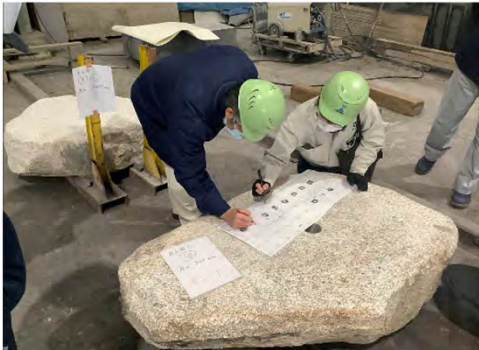
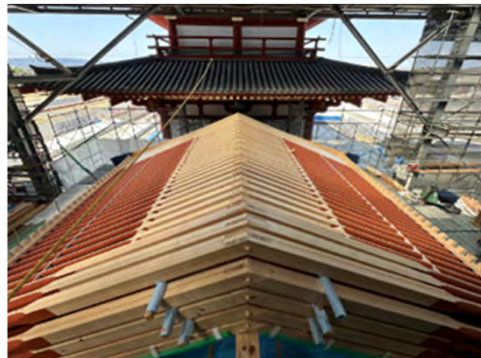
休日は趣味の海釣りや、自然豊かな山へ行き、リフレッシュするそう。

■若い人へのメッセージ

「趣味を持って、チャレンジしたいと思うことはやってみることが大事。楽しみながら出来るようになってきたら続いていくのではないかと。」

平城宮跡歴史公園
第一次大極殿院 東楼 復原整備

工事アルバム
【写真提供 竹中工務店】



「魅せる！現場」

奈良時代を今に感じる 伝統技能の継承現場（延べ1600名を超える方が見学）

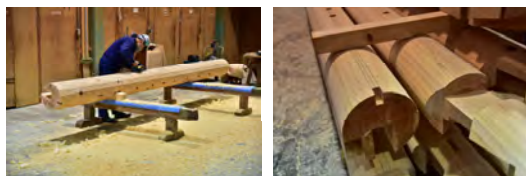


復原工事を支える伝統技術

東楼復原工事は、様々な伝統技術・多くの職人によって支えられています。現場にて、その技法や職人の魂をリアルに感じてください。

○宮大工

宮大工とは社寺などの日本の伝統的な木造建築を取り扱う大工を指します。大まかな削りは機械加工ですが、最後は宮大工達の手によって一本一本、木材の表面が仕上げられています。



○左官

左官とは建物の壁や床等を、鏝(こて)を駆使して作りあげる仕事のことを意味します。東楼では、左官職人によって材料作りから行われ、土壁がつけられています。



○塗装

塗装とは建物の保護や美観などを目的に屋根や壁、床などの材料に塗料を塗る(皮膜を構成)ことです。東楼では、材料となる塗料を現場で一から調合、管理もしています。



詳しい伝統技術の紹介や
復原工事に関わる職人達の
思いはこちらから→



(近畿地方整備局営繕部HP)



平城宮跡 東楼復原工事

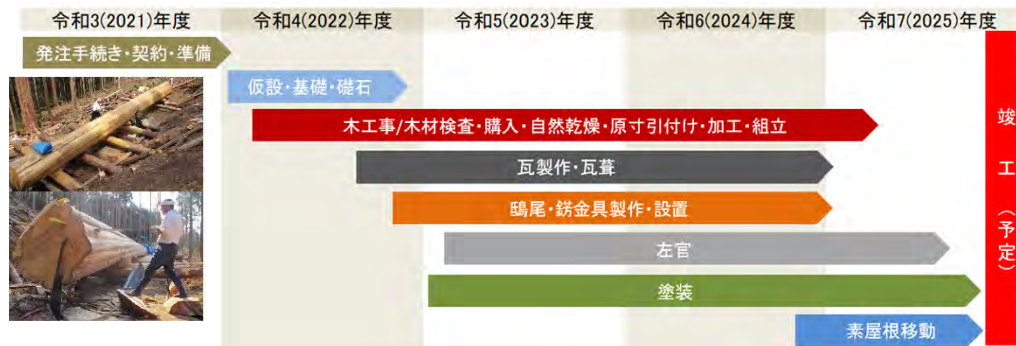




北西(第一次大極殿 院内)から

工事名 : 平城宮跡歴史公園第一次大極殿院東楼復原整備工事
 工事期間: 令和4年3月～令和7年度
 建築面積: 東楼361.031㎡、築地回廊184.687㎡
 最高高さ: 東楼18.659m(地盤面より鷗尾まで)、築地回廊7.449m
 主要構造: 東楼

木造2階建/桁行5間、梁行3間、外周掘立柱、内部礎石建ち、寄棟造り、本瓦葺、組物平三斗
 発注者: 国土交通省近畿地方整備局
 設計・施工監理: 国土交通省近畿地方整備局・京都営繕事務所
 公益財団法人文化財建造物保存技術協会
 施工: 株式会社 竹中工務店 大阪本店



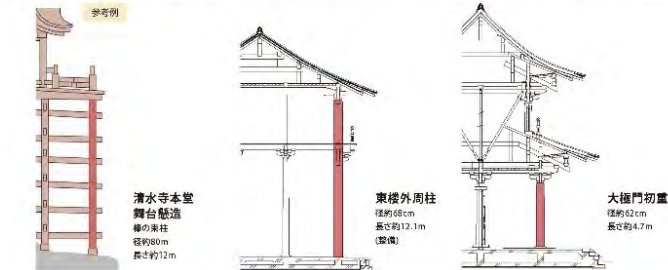
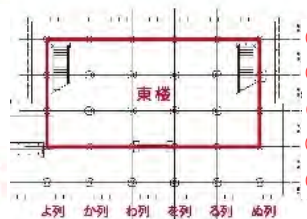
東楼の柱

東楼は昭和47年(1972年)の平城第77次調査で検出されました。桁行5間(22.9m)×梁行3間(11.5m)の東西の楼閣で、柱堀方は3.5m×2.5mの長方形、根入れ深さは2.7mと超巨大です。柱を抜き取る穴(抜き取り穴)は東西に長く、その長さが6mを超えるものもあることから、長大な柱が用いられていたと考えられます。

一方、内部8本の柱は全て礎石建ちで、築地回廊とつながっている床面だったと考えられます。

復原される柱の産地

- お③/奈良県吉野郡東吉野村
- お④/岐阜県不破郡関ヶ原町
- お⑤/三重県松阪市飯高町
- お⑥/和歌山県新宮市
- お⑦/和歌山県田辺市
- お⑧/和歌山県田辺市
- お⑨/奈良県五條市西吉野町
- お⑩/三重県尾鷲市



柱の背くらべ
 諏訪大社御柱/約17m、東大寺南大門通柱/約21m
 大極殿の初重柱/約5.0m、朱雀門の初重柱/約5.3m

京都営繕事務所では、平城宮跡・東楼復原工事の様子を定期的にお知らせする「**現場だより**」を発行しています。どうぞご覧ください。



(京都営繕事務所HP)



おすすめの散歩ルートの紹介もしています。
 (現場だより第13号より)

蘇る「東楼」

大極殿には「五行説をあしらった飾り付け」がされています。

東楼の担当となり、はじめて現地を訪れた際に気づいたこの飾り。「奈良時代にこんな飾りなんてあったのかなあ」と眺めていた「この飾り」が、現場に足を運び重ねる毎に「この事業の全てを現わしているのか」と意識をさせられ、これまで事業に関わった先人たちの想いに馳せました。古来、東洋の五行説では、「木・火・土・金（石）・水」の五つの元素から万物は組成されるといわれています。この自然の要素に対して、電気も今のような機械もない中、少ない道具を工夫して、色々な職種（瓦、木、足場、石、土、塗装（油漆）、彩色（彩画）等）の匠を束ね、大陸から伝わった技術の影響を受けながらも日本の風土に合わせ基壇が高く、軒が深く、鳥が羽ばたくような美しい線と装飾を用いて建てられた東楼を、継承された工匠の技・経験・知識を用いて五つの元素により復原がされています。

復原の工事現場では「魅せる！現場」として多くの見学者を迎えました。

日本は欧州のように建築様式が時代に従属（ギリシャ、ローマ、ロマネスク、ゴシック、ルネッサンス、バロック、ロココ・・・）して変遷するわけではなく、唯一神明造、春日造、茶室、書院造や数寄屋造、コンビニ、スーパー、庁舎等々・・・、建築様式は基本的には「用途」に従い建てられ、需要のない用途の技術は消えていきます。

奈良時代（の為）にあった技術、今まで紡がれた技術の中にある奈良時代。その二つを感じる相乗効果で歴史の輪郭が浮き出し、眠らされていたもの、隠れていたものを多くの人に感じて頂けた「魅せる！現場」（継承すべきものを感じる機会）だったと思います。

（現場担当者 監督職員 上田 聡）



今回の東楼は、朱雀門、大極殿に続く、竹中工務店施工の平城宮跡での3件目の木造復原事例です。

4年にわたる東楼の工期中に職人の様々な技を実際に見る中で、先輩たちの手がけたそれらの建物の見え方が個人的には大きく変わっていきました。

建築現場の醍醐味は、やはり実際に建てていく最中であると、改めて感じ、特にこの伝統建築においては施工中の面白さが格別だと思います。

現場に行くと日々驚きの連続です。木を組む時の軋む音、塗装材料の作り方、瓦を何度も何度も葺き直す、その徹底的なこだわり……。

東楼工事では「魅せる現場」として、工事中の職人の躍動を、多くの一般の方に見ていただくことができ、建築業への魅力向上の成果が得られたと思っています。

(工事施工者 監理技術者 橋本 慧)

伝統建築の物件は数少なく、携わることができる者は限られます。このプロジェクトに参加できたことを光栄に思います。

本工事では外周柱が直径約70cm、全長12mの長尺大径柱などが特徴的で東楼本体に注目が行きがちですが、素屋根のスライドも既存建物を跨いでのスライドという前例のない作業でした。

東楼に使用している軌条桁（レール）を西楼に転用する仕様となっており、実施の約1年前より詳細な検討を開始しました。

軌条桁の転用が課題となり、新設する柱脚部ピースやアンカーボルトの納まりを検討し、コンクリートの打設位置や時期を調整するなど、スムーズに転用ができるように入念に計画を行いスライドは無事に完了しました。

多くの報道、見学者の方にもご覧いただき、注目されるプロジェクトとなりました。

(工事施工者 現場代理人 小西 和仁)



京都営繕事務所HP 「工事中の施設について 平城宮跡第一次大極殿院復原整備工事」

<https://www.kkr.mlit.go.jp/kyoei/torikumi/kouzisisetu/index.html>

平城宮跡歴史公園HP <https://www.heijo-park.jp/>